

序 日本研究に必須な国際的視野

郭 南燕

今年、本誌の編集・出版元の国際日本文化研究センター（日文研）の設立30周年である。日本研究を国際的に行き、海外の日本研究を支援するという使命を貫いてきた30の春秋である。

創立当時の経緯については『日本研究』（第55集、鼎談：「日文研問題」を考える）を参照されたい。当初、国粹的な日本研究を主宰する機関になるのでは、と日本内外から疑問を持たれていた。海外勤務の長い私もこのような不信の声をよく耳にしたものだ。

私は2008年に日文研に勤務してから、日本研究の学際化、国際化、総合化、高度化を目の当たりにしてきた。言語、国籍、分野を超えた日本内外の研究者の参加する研究会、シンポジウム、ワークショップに臨み、国際的視野に立つ研究から生まれた豊富な成果に驚きを禁じ得ない。海外研究者によって啓発されて、新しい研究を始める同僚が多くいる。日本国内に閉じこもり、海外の研究者と交流しなければ、思いもつかないような問題意識に教えられることが日々ある。一方、海外からの日本研究者は、研究資料が不足、研究者人数が少ないため、孤立状態に陥りやすいので、日本国内の研究者との連携を大切にしている。

海外の研究者は、各自の歴史と文化を基礎に置きながら、日本を知る。日本人にとって当たり前のことは、他国の人にとって異様に思われることもある。日本人が「独自」だと思えることが、海外からみて何の変哲もないこともある。つまり、日本を理解するには、日本内外の視点が必要である。日本に関する知識、観点、問題意識について絶えず交流すれば、より客観的な日本理解に結びつくだろう。

今号は、日文研に短期、長期滞在したことのある海外研究者（23人）、日本と外国をまたがる研究者（3人）、日文研の教員（3人）の報告・論文を合計30編収め、一国中心の「日本研究」を超えた国際的視野を示すものである。本号は第Ⅰ部「グローバルな視野からの日本研究」、第Ⅱ部「欧米の日本研究」、第Ⅲ部「アジアの日本研究」、第Ⅳ部「日本から世界へ、世界から日本へ」から成り、多彩な研究

成果と情報を提供する。

まず、第I部「グローバルな視野からの日本研究」では、Kevin M. Doak氏の「Toward a Globalized Japanese Studies: What We Need to Learn from Modern Catholic Japan」は、日本の「独特性」を強調するあまり、日本文化の普遍性を見過ごしがちな日本研究の問題点を指摘し、安土桃山時代から現代まで持続し、日本文化の一部となりきった基督教の「普遍性」を通して、広い視野からの日本理解を提案する。ヴォルフガング・シャモニ氏の「日本十七世紀の自伝、その一側面」は、千年も続く世界の「自伝文学」に日本の「自伝文学」を位置付けるために、日本に渡来した黄檗宗萬福寺僧侶たちの自伝（「行実」、「行由」）を紹介し、中国福建省の禅宗寺の伝統が日本に持ち込まれて継続した事実を通して、近世ヨーロッパの「自伝」と同時期に、東アジアの16世紀にも「自伝」の伝統が連綿と伝わったことを解明している。

Eyal Ben-Ari氏の「Peripherality and Provinciality in Japanese Studies: The Case of the English-Using World」は、海外の日本研究を三つの層に分けている。上にあるのは英語圏、その中間は日本語層、最下層は研究成果が国際的にあまり流通しない他言語圏とする。米国を中心とする英語圏は、評価の基準、研究のレベル、学術用語の使用などをリードし、最下層は上層の権威者の認可を待つ身となっている。このように英語圏の特定の理論に束縛された日本研究は広い視野を失い、問題意識と研究使命が違うはずの非英語圏の研究者（例えば、香港では、英語圏に認められるように英語で論文を書き、地元の読者には中国語で対応する）は常にジレンマを感じていることを指摘する。佐野真由子氏は、氏の主宰する共同研究会「万国博覧会と人間の歴史」の研究成果を紹介し、最初の博覧会の日本部門の準備者がイギリス人外交官オールコックであり、展示された日本部門は外国人の見た「日本」であったことを挙げ、一国主義に陥らない「日本研究」の今後向かうべき方向性を示唆してくれる。

堀まどか氏は、韓国の嶺南大学校で日本語と日本文化を教えた体験に基づき、メディアに対する日韓学生の意識の差と、授業で見せた3本の映画『TOKKO』『永遠の0』『風立ちぬ』における「特攻隊」の表象に示した学生の強い違和感を取り上げて、海外で日本文化を教えるときに、違う民族的風俗、教育システム、生活環境、歴史認識を念頭に入れる必要性と、日本研究に異文化比較の視点を導入することの重要性を教えてくれる。

第II部「欧米の日本研究」では、山崎佳代子氏は、旧ユーゴスラビアのベオグラード大学の日本学の創設者デヤン・ラジッチ博士の功績と人柄を振り返り、日

本学の成立に尽力した数々の研究者を温かく描写している。また、旧ユーゴを解体した内戦（1993年から）のとき、日本学再開の希望を捨てなかった山崎氏の奮闘も感動的である。ベオグラード大学の日本研究はすべて日本とセルビアとの比較という観点から行われていることが特徴である。アグネシカ・コズイラ氏は、ヨーロッパで2番目に古い伝統をもつワルシャワ大学日本語日本学の歴史と現状を紹介している。21世紀初頭に大学図書館に設置された茶室「懷庵」の話も、ポーランドの学生が、いかに日本文化に興味を持っているのかを示してくれている。

アンダソヴァ・マラル氏はカザフスタンの日本研究の始まりと現状を述べ、大きな進歩があると同時に、日本研究者の人数が少ないため、日本研究が独立した分野となりえていないことを紹介する。ポトーエフ・イーゴリ氏はロシア、ブリヤート国立大学における熱心な日本語・日本文化の教育を紹介して、学生の卒業論文テーマの一覧表が示す学生の日本に対する関心と問題意識の多彩さに驚かされる。

ボナヴェントゥーラ・ルベルティ氏の報告は、イタリアの日本文化の研究史を概観し、研究者の名前、専門分野、研究成果を詳細に教示し、豊富な情報源となっている。Andrew GerstleとAlan Cummings両氏は、日本研究者を輩出してきた重要な研究機関ロンドン大学SOAS（School of Oriental and African Studies）の歴史と発展と研究者の業績を丁寧に辿る。Cecile Laly氏はフランス日本学会（The French Society of Japanese Studies）の活動、会員の論著の情報公開、大学院生に対する援助を紹介してくれる。Richard Torrance氏は、オハイオ州立大学（Ohio State University）における日本語教育と日本研究の概要を紹介し、人文科学の人的資源の削減、日本研究の博士学位を目指す人の減少に言及し、近年の漫画ブームによって、学生たちが将来の就職のために、古典文学や歴史の研究だけではなく、日本の大衆文化の研究をも兼ねるようになったことを教えてくれる。寺澤行忠氏は精力的な踏査によって把握したアメリカとドイツを中心とする欧米諸国の日本研究の現状に触れながら、日本語教育や図書収集に存在する問題点を指摘してくれる。傾聴すべき意見が多々ある。

第三部「アジアの日本研究」では、李愛淑氏は、日本古典文学とくに『源氏物語』に関する研究が韓国で盛んであることを紹介し、近年、韓国の人文科学の学科統合、廃科の嵐に影響されて、研究環境が悪化し、博士号取得後の研究者の論文数の減少を憂慮する。李容相氏は、韓国、日本、満州の鉄道のもつ密接な政治、経済、軍事的関係を示し、官僚による政治決定の過程を詳細に研究する必要性を

説く。張寅性氏は、人文韓国 (Humanities Korea) 支援 (2008～2018年) によるソウル大学の日本研究の成果を披露し、日韓比較という従来の図式を離れて、日本をグローバルとトランスナショナルな視点から捉え直す動きが強まったことを紹介し、ソウル大学の出版した論文集の内容に触れる。そこからソウル大学の日本研究の多様化、成熟化が見られる。

龔穎氏は、中国人知識人がいかに明治期の西洋倫理学思想の和訳書と日本人研究者の著書を翻訳し、中国での伝播を広げたのかを詳細に辿る。周閔氏は中国における川端康成の文学に関する研究史、動向、新しい傾向を紹介し、川端文学への理解が深化しつつあることを詳述する。顧偉良氏はまず日本の知識人から中国の文豪周作人宛の1400通の書簡の発見を紹介し、その一部分を引用して、日中文化交流の一側面を鮮やかに描写する。そして、日本占領期の職務に関する周作人日記の内容に対する改ざんを通して、中国国内の周作人研究の政治性を批判し、歴史的人物の研究の客観性と公平性の重要性を強調する。姜龍範氏は中日国交正常化以来の中国で行われた過去45年間の日本研究の主な分野と論文数の変化を教えてくれる。

グエン・ヴァー・クイン・ニュー氏は、ベトナムにおける近年の俳句研究の動向を紹介し、ベトナムで展開された俳句創作と研究成果 (著書、論文、学会発表) の情報を提供し、氏の主導した全国俳句コンテストの入賞作品の和訳を提示してくれる。P・A・ジョージ氏は、近年のインドで日本関連企業への就職のため、盛んになった日本語教育の歴史と現状を紹介し、勤務校ネルー大学の日本語・日本文化研究の隆盛を詳述する。また、インドで日本研究が普及していない原因は、日印両国の無関心と先入観にあるとし、今後の発展を展望する。

第4部「日本から世界へ、世界から日本へ」は、日本文化がいかに海外へ渡り、受け入れられたのかを中心とする。新山カリツキ富美子氏は1698年、ウィーンで上演された細川ガラシャについてのイエズス会音楽劇「気丈な貴婦人」(Mulier fortis) を取り上げ、2017年の宮津での上演予定に触れ、300年余りにわたる日本とオーストリアとの文化交流のきっかけを作ったガラシャの役割を教えてくれる。Michelle Kuhn氏は米国のシカゴ美術学院収蔵の江戸時代の嵯峨本「三十六歌仙絵」と勝川春章画の「三十六歌仙絵本」を紹介し、日本美術の海外輸出を考察している。徳永光展氏は、夏目漱石『心』の英訳本三つにある、日本語語彙の訳し方と訳注の変遷を通して、日本文化がいかに海外に浸透しているかを論証する。

富田哲氏の報告は、日本統治期の台湾総督府、とくに法院や警察における、台湾語などの通訳にたずさわる日本人や日本語を解する台湾人の通訳者と通訳行為

を対象としたここ10年間の研究成果を紹介する。社会言語学、歴史学、民族学の観点から日本統治期の通訳行為のもつ政治的、イデオロギー的な意味を考察することは新しい分野であり、さらなる展開が待ち望まれる。宗主国の日本語と台湾現地語との媒介者の個人的葛藤は、日本統治期の言語使用の複雑性、日本語教育史の負の遺産を示してくれる。Nanyan Guo (郭南燕)の報告は、1920年から1940年までのあいだ、日本在住の外国人宣教師と作家の行った日本語創作を通して、多国籍の書き手によって日本語が「国際化」され、日欧交流が直接、迅速に行われていたことを示す。

最後に掲載されるInaga Shigemi (稲賀繁美)のエッセイは、伊勢神宮の20年おきの遷宮によって保たれたものと失われたものを例に、伝統の受け継ぎに必然的に伴われる喪失を哲学的に論じ、生者が死者に生かされ、死者が生者のゆりかごだ、という生命の新陳代謝を詩的に語る。第二次世界大戦終了後すでに71年経った今でも、日本との和解がまだ成立していないアジア諸国の政治的現状を連想させ、異文化理解としての「日本研究」のもつべき責任を新たに想起させてくれる。

以上のように、日本研究に国際的視野を導入しなければ、日本に対する理解が深まらず、偏ってしまう可能性があり、学術的価値も限られてしまうことは明らかである。したがって、日文研のこれからの使命は国際的視野からの日本研究の質を高めていくことではないかと思う。

最後に、本号の論文の収集は日文研の研究協力課の輝川尚子氏に負うことが大きく、編集は出版編集室の伊藤桃子氏に多大な協力を得たこと、英語論文の校閲をRaquel Hill氏に担当していただいたこと、本誌の編集委員松田利彦氏と坪井秀人氏に助言をいただいたこと、中国美術学院の鄭巨欣教授の筆による墨絵「朝顔」を表紙に利用させていただいたことを記して、深甚なる謝意を表す。